

事業報告書

自 平成 29 年 4 月 1 日
至 平成 30 年 3 月 31 日

I 事業活動に関する事項

[主催事業]

1. KAWASAKI しんゆり映画祭

■2017 年度 ボランティアスタッフ説明会

期日：2017 年 5 月 27 日（土） / 6 月 4 日（日）

会場：川崎市アートセンター 3F コラボレーションスペース

期日：2016 年 7 月 24 日（月）

会場：新百合 21 ビル 映画祭事務局

新規ボランティアスタッフ募集を上記日程で実施。今年はスタッフの提案で、川崎市アートセンターにて午前午後の各日 2 回の説明会を実施した。追加募集として、7/24 にも事務局にて実施した。

ボランティアスタッフ募集の告知方法は例年どおり、市内公共施設へのチラシ配布、市政だより、映画祭ホームページ、DM 等で行なった。

前年同様に 1 年間参加できるスタッフを募集し、結果 15 名の方が新たにスタッフとして登録した。映画祭ボランティアの活動期間は、6 月～3 月。

■2017 年度 ボランティア全体会

期日：2017 年 3 月～2018 年 1 月

内容：映画祭事業の連絡、各セクションの活動報告・打合せ、ボランティア交流

会場：川崎市アートセンター

ボランティア全体が集まる全体会を 2 か月に 1 回程度実施した。映画祭運営委員会や単年度実行会議で決定された情報の共有や軽作業（ダイレクトメール発送準備など）も行われた。

2017 年度の開催日は 3/26、4/22、6/17、8/26、9/18、10/22、1/27 となった。

■2017 年度 ボランティアスタッフ研修

期日：2017 年 9 月 30 日（土）、10 月 22 日（日）

内容：ボランティア研修 ～施設利用ガイダンス

会場：川崎市アートセンター（小劇場・映像館）

川崎市アートセンターをメイン会場として映画祭を実施していることから、アートセンター職員の協力を得て施設の特徴や利用方法について、研修を実施した。2 つの会場で使用内容や注意点が異なることもあり、各会場を実際に見ながら使用方法、避難経路の確認、設備の特徴の確認を行った。

■第18回ジュニア映画制作ワークショップ

参加希望者向け説明会

期日：2017年5月28日（日） / 6月4日（土）

会場：中原市民館 / 川崎市アートセンター

映画制作ワークショップ

期間：2017年6月11日（日）～2017年11月3日（日）

場所：日本映画大学、川崎市アートセンター、新百合トウェンティワンホール、
百合丘勸交会館

参加者数：28名（チーム名 Movie Cats）

川崎市とその周辺に在住・在学している中学生を対象とした映画制作ワークショップを開催。総合指導に日本映画学校出身で長年ワークショップに技術サポートとして関わって頂いている川久保直貴氏、技術指導に猪本雅三氏（撮影）、若林大介氏（整音）を迎え、技術サポートとして日本映画学校・日本映画大学卒業生を中心に8名が参加して指導が行われた。今年度は参加生徒が多かったことにより撮影期間中は2班体制をとった。

5月中旬より川崎市教育委員会の協力により、市内公立中学校生徒に参加説明会チラシを配布。ワークショップ期間中の出席率の向上や、希望者との意思疎通を図るために、参加希望者は説明会への参加を必須としている。アートセンターの他、川崎市中部の説明会として中原市民館で実施した。

6月11日（日）に参加生徒とスタッフの顔合わせとオリエンテーションを行った。同日、川久保講師による脚本指導が始まり、参加生徒がチームを組み即興演技を取り入れた脚本作成が進められた。

7月9日（日）には映画技術講座を実施。技術指導の猪本雅三氏より、日本映画大学にお借りした実際撮影に使用するカメラ等機材の使用法や映画撮影の方法の講義を受ける。

その後、ロケハンや小道具作成などの撮影準備を経て、7月24日より撮影開始。撮影場所は新百合ヶ丘近隣を使用し、8月4日までの期間に行った。

8月5日より編集作業に入り、参加者全員が編集作業を体験。日本映画大学のスタジオを利用してアフレコ・MA作業を行い、『ハッピーエンドを君に』（48分）を完成させ8月22日に試写を行った。



■ワークショップ参加生徒



■屋内撮影風景



■ロケ撮影風景

■第18回 野外上映会 共同主催：麻生区

期日：2017年9月2日（土）

場所：川崎市立はるひ野小学校・中学校 大アリーナ（体育館）

参加者数：2869名（延べ来場者数）

18回目を迎えた今年度の野外上映会は、麻生区はるひ野での初めての開催となった。これまで川崎市立麻生小学校で近年実施してきた野外上映会を、別の地区で実施することによって、映像文化に触れる機会を新たに創出することができた。また、当日は40人以上の町内会ボランティアの方々にもご参加いただいたき、「映像のまち・かわさき」「芸術・文化のまち麻生」を通して、地域の魅力を改めて発見してもらい、町の活性化や市民同士の交流にもつながった。

今年の上映作品は『ひつじのショー シュン スペシャル ～いたずらラマがやってきた！～』（2015年／イギリス／28分）と『眠れない夜の月』（2015年／日本／25分）の短編映画を2本立てで上映。

学校側の都合により、今年はこどもたちの夏休み中でなく、9月頭に実施。広報活動は、川崎市や麻生区の広報誌への掲載の他、タウン誌や雑誌への掲載、小学校へのチラシ配布等を7月より展開。

当日は台風一過の強風の為、体育館（大アリーナ）内での開催となった。上映場所を大アリーナとし、中庭を屋台エリアとした。中庭には6店舗（屋内実施につき2店舗辞退）と町内会出店のドリンク販売、映画祭と町内会の手作りゲームコーナーが出展した。

映画祭代表の中山による挨拶、北沢区長のご挨拶、来賓紹介に続き、地元団体・店舗のプレゼントが当たる抽選イベントも実施。地元の劇団「カンパニー間」の大谷恵理子さんらによる司会で、サッカーチームの川崎フロンターレのふろん太くんも参加して盛り上げてくれた。

また、はるひ野という土地での開催にあたり、『はるひ野生まれ』という地域の歴史と現在を紹介する動画を作成し、オープニングで上映した。動画には「はるひ野小学校」の生徒が出演した。

日本赤十字社へ看護師派遣を要請したが、体調不良、怪我をされた方などはいなかった。



■会場での整理券配布風景



■スタッフ手作り看板



■作品に因んだ手作りゲーム



■オリジナル地域紹介動画上映



■上映前プレゼント抽選会



■強風の為、体育館での上映

■第23回 KAWASAKI しんゆり映画祭 2017

□ 本祭実施概要

- 主 催 NPO 法人 KAWASAKI アーツ
- 企画・運営 NPO 法人 KAWASAKI アーツ・KAWASAKI しんゆり映画祭
- 理 事 長 藤田朝也
- 映画祭代表 中山周治
- 共 催 川崎市、川崎市アートセンター、川崎市教育委員会、日本映画大学、
(一財)川崎新都心街づくり財団、昭和音楽大学
- 後 援 「映像のまち・かわさき」推進フォーラム、麻生区文化協会、
(公財)川崎市生涯学習財団、NPO 法人しんゆり・芸術のまちづくり、東京新聞、
朝日新聞川崎支局、毎日新聞川崎支局、読売新聞川崎支局、(株)タウンニュース社、
マイタウン、産経新聞社横浜総局、FMヨコハマ、かわさき FM (79.1MHz)、
(株)メディスタくらしの窓新聞社、(株)ジェイコムイースト 町田・川崎局
- 協力・協賛 小田急電鉄(株)、大和ハウス工業(株)、麻生区商店街連合会、
(株)エーイーティー、(有)柿生恒産、川崎信用金庫、(株)川崎フロンターレ、
新百合丘農住都市開発(株)、ホテルモリノ新百合丘、(株)カジノヤ、
川崎商工会議所、河津造園土木(株)、小田急新百合ヶ丘エルミロード、
新百合ヶ丘商店会、セレサ川崎農業協同組合、(株)谷川建設、(株)フジ薬局、
三井ホーム(株)、川崎医療生活協同組合 あさお診療所、寡黙堂、カンガルー、
アジア料理 JASMINE、Ti-da Bar、パティスリーエチエンヌ、(株)シノワーズ、
ノボルノバル、(株)北島工務店、イオンシネマ新百合ヶ丘、イオン新百合ヶ丘店
- 期 間 10月29日(日)～11月5日(日) [10月30日(月)休映]
- 会 場 川崎市アートセンター・映像館(113席)、小劇場(195席)
イオンシネマ新百合ヶ丘 9番スクリーン(240席)
- 上映作品数 28作品 ●登壇 30名 ●総入場者数 2127人 ●ボランティア 49名

2017年度のKAWASAKI しんゆり映画祭は開催場所を川崎市アートセンター・アルテリオ映像館、小劇場の2会場をメイン会場とし、単発上映をイオンシネマ新百合ヶ丘で行った。

アートセンター10周年企画として日本映画学校出身の勢いのある監督・中野量太監督の特集を組んだほか、映画祭では2013年以来となる3D作品の上映を行った。コラボレーションスペースでの上映作品に因んだ原画展や、監督や俳優をお呼びしてのトークイベントなど映画と観客がつながることが出来る仕掛けが数多く提供された。ジュニア映画制作ワークショップでは、ワークショップ史上最長の48分作品が制作されたほか、2016年度制作作品が「釜山国際子供・青少年映画祭」のコンペ部門で「Brilliant Star Award」という賞を受賞し、しんゆり映画祭内でも凱旋上映が行われた。

バリアフリー上映では、『しゃぼん玉』に対して副音声ガイドを作成し、字幕付き上映では聴覚障がいをお持ちの監督をお呼びしての手話通訳付きトークイベント、保育付き上映を実施した。

■ 4月～8月 プログラム選定

昨年から実施している、ボランティアスタッフから公募を募り、投票して上位作品を上映するという方法を取り入れた2年目となった。昨年度の反省点を活かして、公募の募り方や投票方法の改善が行われた結果、昨年とはまた違ったスタッフからの応募もあり、徐々に浸透が見受けられた。プログラム委員で、継続枠の上映作品選定や全体の調整等を4月～8月まで定期的に会議を実施し確定させた。

■ 8月～10月 広報宣伝物、WEB ページ等の作成

プログラム決定を受け、チラシの制作やホームページ・Facebook・twitterの更新等が行われた。本祭開催期間中にインスタグラムの開設も行われた。昨年改訂したA4四つ折りリーフレットを作成し、その他に来場ゲストをまとめたチラシのほか、各個別企画のチラシも市民スタッフの手で作成された。

■ 9月～11月 広報活動

映画祭がスタートした1995年から実施している駅前でのポスター展を今年も実施した。また、川崎市の協力による川崎駅アゼリアビジョンでの予告編の放映、麻生区の協力による駅前のバスターミナルの柱巻広告も実施した。小田急電鉄の協力による駅構内への映画祭ポスターの掲示、小田急バスの協力によるバス内の吊り下げチラシの設置、麻生区役所でのポスター展など実績のある広報を中心に展開された。川崎市バスでの吊り下げチラシなど広報の幅を広げる取り組みも並行して行われた。

また、昨年から協力関係にある川崎大師ゆめシネマでは映画祭の予告編を流すと共に、2015年度ジュニア映画制作ワークショップ作品「ムッツマン」の上映を行い、川崎市南部での宣伝の場となった。



■ 駅頭チラシ配布



■ 区民まつりでの広報風景



■ 駅前でのPRの様子



■ 駅前ポスター展



■ 麻生区協力による柱巻広告



■ イオンシネマ内ポスター展

■ KAWASAKI しんゆり映画祭（本祭）

10月29日（日）～11月5日（日） [会場：川崎市アートセンター] ※10月30日は休映日

11月2日（木） [会場：イオンシネマ新百合ヶ丘] （※1回上映のみ）

川崎市アートセンターの映像館、小劇場を利用し国内外の秀作を上映、イオンシネマ新百合ヶ丘にて3D作品の上映を行った。今年はいこれからの日本映画を背負っていく監督の特集上映や、映画監督が撮るテレビ番組のスクリーン上映、3D作品の上映など、新たな映画・映像体験を提供できるラインナップが並んだ。昨年から実施しているスタッフ全員参加の公募・投票も行い、今年度も多くのスタッフが作品選定に関わる機会を提供することができた。土日・祝日を中心に上映作品にちなんだゲストを招き、それぞれ担当の市民プロデューサーが企画したトークイベントが行われた。



■ しんゆり映画祭会場前風景



■ イオンシネマでの上映前



■ 深田監督、筒井さんサイン会



■ 山下監督・松江監督トーク



■ 『哭声』 國村隼さん



■ 原さんと酒井監督トーク



■ マサ・ヨシカワさんトーク



■ 古居みづえ監督のトーク



■ 三宅監督と村山監督



■ 林遣都さんと東監督トーク



■ 佐藤忠男さんによる解説



■ 柳家喬太郎さん、吉野監督

【特別企画】

□ 10月29日、11月5日「しんゆり凱旋！ 中野量太監督特集」

2016年度に日本アカデミー賞において最優秀主演女優賞と最優秀助演女優賞の2冠を獲得した「湯を沸かすほどの熱い愛」の中野量太監督をゲストに招き、初期の中短編作品と併せた特集上映を行った。オープニング作品として「湯を沸かすほどの熱い愛」「琥珀色のキラキラ」を上映し、監督をお呼びしてのゲストトークを行った。クロージング作品「沈まない三つの家」「お兄ちゃんは戦場にいった!？」の上映では、監督と合わせて多くの出演者が来場し、フィナーレを賑やかに飾ることができた。



■ 中野量太監督のトーク風景



■ 中野監督と出演者一同



■ 上映終了後の集合写真

□ 11月3日 ジュニア映画制作ワークショップ発表会（会場：アルテリオ小劇場）

今年度も「ジュニア映画制作ワークショップ」の完成作品発表会をアルテリオ小劇場にて実施。制作に関わった中学生や家族のほか、一般の観客も鑑賞に訪れた。完成作品『ハッピーエンドを君に』（48分）とメイキング映像の上映後、参加した中学生の舞台挨拶、指導講師による講評を行い、今年のワークショップの様子を振り返った。発表会の内容決めや進行も中学生のアイデアをもとに行われた。



■ ジュニア映画制作ワークショップ 入場整理券配布風景/上映前会場内風景/舞台挨拶の様子

11月3日 凱旋上映 学校は二度死ぬ（会場：アルテリオ映像館）

2016年度ジュニア映画制作ワークショップ作品が「釜山国際子供・青少年映画祭」のコンペ部門で「Brilliant Star Award」を受賞した。受賞の連絡を受け、7月15日（土）から7月17日（月・祝）で韓国へ渡航をした。しんゆり映画祭でも、凱旋上映を行い訪韓の報告などを行った。



■ しんゆり映画祭凱旋上映



■ 釜山に渡航した参加生徒



■ 各国の制作者たちと交流会

□ バリアフリーシアターの実施（10月31日、11月1日、3日、5日）



■ 副音声ガイド録音風景



■ 副音声用ラジオ貸出風景



■ 手話通訳付きゲストトーク

● 保育付上映

10月31日（火）上映の『はらはらなのか。』『スイート17モンスター』に関して、6ヵ月～4歳までのこどもを預かる託児サービスを実施。地元の保育グループ「ジャンケンポン」と提携して実施し、保育者を2名派遣してもらい、告知にも協力を得ている。保護者の映画鑑賞時間中、こどもを預かった。

● 副音声ガイド付上映

10月31日（火）映像館、11月3日（金・祝）小劇場での邦画『しゃぼん玉』上映に関して、視覚障がい者向けの副音声ガイドを映画祭独自に制作・朗読・収録をし提供した。

11月3日の上映回ではゲストに林遣都さん・東監督をお呼びして、満席となった。今回初めて小劇場での副音声ガイド付き上映を行ったが、ガイド利用者が座席数の少ない映像館の方が多く、いつも利用される方にとっては慣れた鑑賞環境での利用が好まれる傾向がみられた。（サービス利用者数・14名）

● 日本語字幕付上映

11月1日（水）、11月5日（日）に上映したドキュメンタリー映画『Start Line』に関して、聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて実施した。

作品は、生まれつき耳の聞こえない監督自身が、自転車で日本縦断し、健聴者とのコミュニケーションに向き合ったドキュメンタリーで、健聴者も聴覚障がい者も共感できる作品選定を心掛けた。

11月5日（日）の上映後に主演・監督した自身も聴覚障がいを持つ今村彩子監督にお越し頂き、手話通訳付きのゲストトークショーと監督のサイン会を行った。アートセンターのロビーで手話による会話が活発に交わされた。

□ 11月4日「ミリキタニの猫」原画展（会場：3F コラボレーションスペース）

『ミリキタニの猫〈特別篇〉』の上映に伴い、ゲストにご来場いただいたプロデューサーのマサ・ヨシカワさん所蔵のジミー・ミリキタニの原画の展示が行われた。



■ 『ミリキタニの猫』原画展

□ 11月3日（金・祝）～11月5日（日） シネマウマカフェ （会場：3F コラボ）

昨年度に引き続き、上映会場であるアートセンター3F コラボレーションスペースにおいて、近隣の飲食店と提携した「シネマウマカフェ」を開設した。日替わりでお弁当、コーヒーなどの提供を行い、来場者に地元のお店を紹介し、その味を楽しんでもらうことができた。



シネマウマカフェ参加店舗

「NARUTO Coffee&Roasters（狛江）」、「ムビリンゴ（読売ランド前）」「cafe Sante（百合ヶ丘）」

□ 11月5日（日） 映画祭会場前での連動イベント

しんゆりマルシェ 2017 実行委員会による「しんゆり北口マルシェ」、「ハロウィンパレード」が開催最終日に川崎市アートセンター前にて実施され、映画祭との連動が行われた。



□ 11月5日 『活弁映画と落語』 & 『シネマ落語』（会場：新百合 21 ホール）

新百合 21 ホールと映画祭のコラボレーションとして『活弁映画と落語』&『シネマ落語』が行われた。第一部の『活弁映画と落語』ではカラード・モノトーンの伴奏をバックに弁士・澤登翠さんによる「臉の母」活弁付き上映と、初音家左橋さんの「芝浜」が披露された。第二部の「シネマ落語」では映画「ローマの休日」を下敷きにした落語が披露され、映画祭を盛り上げるイベントとなった。

□ 『ジュニア映画制作ワークショップ追加上映会』（会場：川崎市市民ミュージアム）

2017年11月3日の映画祭でのジュニア映画制作ワークショップ発表会は多くの鑑賞希望者があり、整理券が30分ほどでなくなってしまう為、追加上映会を2018年3月21日に実施。

当日は雪が降る悪天候となったが、11/3に会場に入れなかった参加者の家族やエキストラ出演者を中心に一般客の来場もあった。上映前に主題歌を提供してくれた「YAMONES」によるミニライブも行われた。



第23回 KAWASAKI しんゆり映画祭2017 上映作品

◇リーフレットキャッチコピー 「ようこそ映画新世界へ！」

【川崎市アートセンター 10周年おめでとう しんゆり凱旋！中野量太監督特集】…

『湯を沸かすほどの熱い愛』『琥珀色のキラキラ』『沈まない三つの家』『お兄ちゃんは戦場に行った!?!』

【山田孝之の“しんゆり映画祭”】…『山田孝之のカンヌ映画祭』『映画 山田孝之 3D』

【人生の先輩にカンパイ！】…『ミリキタニの猫<特別篇>』『人生フルーツ』『飯館村の母ちゃんたち 土とともに』

【しんゆりバリアフリーシアター】…『Start Line』（バリアフリー日本語字幕）『しゃぼん玉』（副音声イヤホンガイド）

【マレビト 異界からの来訪者】…『哭声/コクソン』『永い言い訳』『淵に立つ』『鳥（仮）』

【注目！今アツイ監督たち】…『スプリング、ハズ、カム』『はらはらなのか。』（保育付上映回）

『サイレン』『墮ちる』『そうして私たちはプールに金魚を、』（短編3本立て上映）

【しんゆり洋画セレクション】…『スウィート17モンスター』（保育付上映回）『T2 トレインスポッティング』

『ノー・エスケープ 自由への国境』

【鈴木清順監督追悼上映】…『ツイゴイネルワイゼン』『東京流れ者』『けんかえれじい』

【ジュニア映画制作ワークショップ】…『ハッピーエンドを君に』『学校は二度死ぬ』

合計 28 作品（※中・短編含む）

登壇者（敬称略、順不同）

中野量太（監督）、小宮一葉（俳優）、内村 遥（俳優）、新井 郁（俳優）、桜井淳美（俳優）、松原菜野花（俳優）、橋本拓也（俳優）、久藤今日子（俳優）、田中えみ（俳優）、泉 光典（俳優）、大沢まりを（俳優）、山田菜々子（俳優）、木村知貴（俳優）、山下敦弘（監督）、松江哲明（監督）、マサ・ヨシカワ（プロデューサー）、古居みずえ（監督）、今村彩子（監督）、東 伸児（監督）、林 遣都（俳優）、國村 隼（俳優）、深田晃司（監督）、筒井真理子（俳優）、吉野竜平（監督）、柳家喬太郎（落語家・俳優）、酒井麻衣（監督）、原菜乃華（俳優）、三宅伸行（監督）、村山和也（監督）、佐藤忠男（評論家）

合計 30 名

動員数データ

チケット売上枚数 1884 枚 観客動員数 2127 名 合計上映回数 42 回

有料プログラム数 21 プログラム（26 作品） 上映プログラム数 23 プログラム（28 作品）

今年度の総括と来年度への取組み

2017 年度は地域の他団体とのつながりが広がった年となった。昨年度からの新百合 21 ホールとのコラボレーション企画として行われた『活弁映画と落語』&『シネマ落語』はボリュームも増し、内容の濃いイベントになった。川崎大師ゆめシネマでは映画祭の予告編を流すのと共に、2015 年度ジュニア映画制作ワークショップ作品「ムッツマン」の上映を行い、川崎市南部での宣伝の場となった。しんゆりマルシェ 2017 実行委員会による「しんゆり北口マルシェ」、「ハロウィンパレード」が開催最終日の 11/5 に会場前にて実施され、大いに賑わった。今後もこのつながりを活かして継続・拡大させていきたい。来年度以降も持続可能な組織づくりと共に、さらに市民映画祭として基盤を強化しつつ街を盛り上げる映画祭へと施策を行っていきたい。

以上

[企画・制作事業]

1. バリアフリーシアター制作事業

1997年より活動している「バリアフリーシアター制作」は21年目を迎えた。

(1) 視覚障がい者向けの活動

・音声ガイド制作と視覚障がい者の介助

視覚障がい者が映画館で映画を楽しむための音声ガイドは、28年度より1本増えて6本制作した（映画祭作品1本含む）。副音声ガイドと日本語吹替は、全て収録し、アートセンターでは、5本の作品に対して、3回/1作品、一年間で15回のバリアフリー上映を実施した。

バリアフリーシアター制作チームのスタッフは、視覚障がい者から希望者があれば新百合ヶ丘駅⇨アートセンターの送迎と劇場内に於ける介助を行っている。その際、利用者の声を聞き、ガイド作りにフィードバックしている。

■川崎市アートセンターからの委託およびしんゆり映画祭で音声ガイドを作った作品。

- ①『幸せなひとりぼっち』 副音声音声ガイド台本/日本語吹替
- ②『オケ老人!』 副音声ガイド台本
- ③『タレントタイム』 副音声ガイド台本/日本語吹替
- ④『私は、ダニエル・ブレイク』 副音声ガイド台本/日本語吹替
- ⑤『ピンカートンに会いに行く』 副音声ガイド台本
- ⑥しんゆり映画祭プログラム『シャボン玉』 副音声ガイド台本

(2) 聴覚障害者に向けての活動

しんゆり映画祭にて、聴覚障がい者用日本語字幕付き素材の提供を受けて上映。上映後は、**手話通訳付きで監督のトークショー**と監督のサイン会を実施。（詳細は映画祭報告 P. 12 を参照）

(3) 保育サービス付き上映

しんゆり映画祭にて、2作品の上映で保育サービスを実施。（詳細は映画祭報告 P. 12 を参照）

(4) 新しい朗読者の養成

スタッフ向けに個別指導形式の朗読講習「副音声を読んでみよう！」を7回（1回/月）行った。

1時間/1人、3～4人/1日、受講料500円/1回（講師謝礼として半額はNPOが補助）

声優養成学校で講師経験のある録音編集技術者柚澤佳枝さんの発案によりスタート。音声ガイド/日本語吹替収録の演出を担当している制作スタッフ野田陽子さんも講師として協力。一人一人に合わせた指導とアドバイスを行った結果、受講者に確かな変化が見られ、新しい朗読者が二人誕生した。一人で担っていたベテラン朗読者には、良い刺激となり、新しいアプローチを試す場となった。

長年の課題であった朗読者の養成に繋がった。講習会は制作進行の高松啓子さんが運営にあたった。

(5) 新しいスタッフのリクルートと定着

毎年、新規に参加する映画祭のボランティアスタッフでバリアフリーセクションの活動に興味を持ったスタッフへは、映画祭のセクションチーフ北村貴美子さんが送迎や音声ガイド付き上映の体験及び台本制作ミニ講座への参加を個別に呼びかけ、必ず活動の場に足を運んで貰うようにしている。その結果、映画祭のボランティアスタッフが NPO の通年の制作活動に参加するという流れが出来ている。

(6) スタッフブログとツイッターによる情報発信

平成 24 年 6 月 (<http://barrierfree-theater.sblo.jp/archives/201206-1.html>) からスタートしたバリアフリーシアター活動日誌は、今月から 7 年目に突入した。ブログでは、制作スタッフの西岡千代子さんがガイド制作の様子やバリアフリー上映、制作スタッフの声や映画に関する話題を発信している。最新ブログは、先月 31 日「ご存じですか?『映画の副音声ガイド貸し出しをおこなっています』

(<http://barrierfree-theater.sblo.jp/article/183380601.html>)。

活動の足跡を伝える貴重な記録となっている。

平成 29 年春から当時活動歴 2 年目のスタッフ北村貴美子さんが「しんゆりバリアフリーシアター」として発信を始めた。フォロワー数が少しずつ増えて 80 を越した。外国映画音声ガイド・日本語吹替えアフレコ風景、アートセンターのバリアフリー上映情報、活動日誌のブログ更新、映画祭の情報など今の情報を発信している。

(7) 2017 年活動のまとめと課題

現在の実働スタッフは、16 名。活動に参加している理由や各自を取り巻く状況はそれぞれ違っている。音声ガイドは、台本担当者の書いた「たたき台」を元にディスカッション形式で作っているのだから、違った視点からの意見はとても貴重である。スタッフがそれぞれの状況に応じた頻度で参加し、自分の特性にあった目標を見つけ、実現できる活動の場となるようにしていきたい。

課題は、日本映画の音声ガイドに関しては、携帯アプリ UDcast の急速な普及により、対応している作品は、映画館、家庭でも視聴可能な時代に突入した。映画祭で音声ガイドを付けて上映する作品の選択肢が年々狭まっていることであるが同時に KAWASAKI アーツが制作した音声ガイドを UDcast 化する道をさぐることも求められている。

2. 劇団わが町

アートセンター創設時より、ふじたあさや中心に企画していた市民のための市民による新百合ヶ丘の市民劇団。2012年6月に生まれた新しいゆるやかな劇団。劇団員は地域住民の方々を中心に構成されている。2017年に第二期に突入し、改めてオーディションを行い、大幅にメンバーを更新し、総勢約45数名の新たなスタートを切った。年齢制限はなく、現在9～76歳までのメンバーが所属。しんゆりシアターのラインナップの一翼を担い、長期的に様々な創造活動を行なっている。

■しんゆりシアター 劇団わが町 第7回公演

「クリスマスキャロル」

開催期間：2017年12月14日（木）～17日（日） 6回公演

会場：川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

2012年より始まった劇団わが町、指定管理第二期の初公演であり、劇団通算第7回目の公演となる舞台は、1952年に村岡花子が翻訳した、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』を上演した。

新たなメンバーを得たことで、劇団がリフレッシュし、活性化された。company maの大谷賢治郎氏によるワークショップ内では、身体をほぐしたり、ディバイジングを体験していく中で、新メンバーと既存メンバーとが、同じスタートラインに立ち、新鮮な気持ちで新たな劇団をつくっていく勢いが感じられた。また、今作は原作ディケンズ、翻訳村岡花子の作品をベースに、脚色としてふじたあさや氏だけでなく、元劇団員であった故上崎実氏と、company maのメンバー原田亮氏がメインとなって、脚本制作をした。上演された舞台は、一部ダブルキャストで「モミ組」と「ヒイラギ組」の2組に分かれ、3公演ずつ、合計6回公演で行われた。6回公演で計979名の動員となり、鑑賞した来場者からも大変好評な舞台となった。当法人は本公演の企画・制作を担った。



■村岡花子を囲む子どもたち



■マーレイを囲む幽霊たち



■主役のスクルージ



■スクルージと過去の精霊たち



■若き日のスクルージとベル



■クラッチット一家

[主催事業]

1. company ma 劇団「間」第3回公演『wonder』

開催期間：2018年3月3日(土)～4日(日) 4回公演

会場：川崎市アートセンター アルテリオ小劇場 作・演出：原田 亮 監修：大谷 賢治郎

出演：安達原 旭、大谷 恵理子、森山 蓉子、大谷 賢治郎、庄崎 真知子(劇団銅鑼)、勝山 優、
小山 雲母、長原 茉穂、タカミ ナオミ、大山 秋 (青年劇場)、
一平 杏子 (パフォーマンス集団・たまご)、武井 雷俊 (劇団アッカパラメント座)

大谷賢治郎主宰の company ma 劇団「間」は、「子どもが笑えば、世界は笑う」を合言葉に、新百合ヶ丘を拠点に活動。初演より、毎回川崎市アートセンターで本公演を続けるその3公演目。

今回は、劇団わが町に初回より客演・ワークショップ担当もしている原田亮が、company ma 本公演で初めて作・演出を担った。「不思議の国のアリス」をモチーフに、身体表現を中心にストーリー展開していく作品だが、映像や照明を兼ねた小道具、音楽を大きく演出に取り込み、限られた台詞や歌で不条理な世界を表現。アリスが成長する中で、他者や世界と出会い対話しながら、己を知り自我を形成していく過程を疾走感と共に力強く描いた。今回の客演者には、身体能力の高いパフォーマーも多く、全体的にアクロバットな動きも多様され舞台にダイナミズムを生み、複数の身体の組み合わせで時に大道具セットの役割も担い、アリスの不思議な世界観を有機的に生み出す、舞台表現の新たな可能性を探るチャレンジングな作品となった。

公演来場者には親子客が多く見られ、こどものみならず大人にも大変好評であった。総動員数は、4回公演で596人。前回公演から約100人の増員となり、初回公演からは約200人増となる。

また、今作は日本芸術文化振興基金より、カンパニーで初めて助成を請けることとなった。KAWASAKI アーツでは、公演の主催、制作業務・助成申請関連事務を担当した。



■ 『wonder』の各シーンの様子

[委託事業]

1. 宮前区社会福祉協議会 福祉大会 映画上映

川崎市宮前区社会福祉協議会主催の「福祉大会（平成 29 年 12 月 3 日（日）宮前市民館大ホールにて開催）」における映画『ベトナムの風に吹かれて』（バリアフリー（日本語字幕付き））の上映のコーディネート、当日映写手配を担った。当日の動員は 500 名程度。好評を得た上映会となった。

2. 麻生区社会福祉協議会 福祉啓発映画会 映画上映

川崎市麻生区社会福祉協議会主催の「福祉啓発映画会（平成 30 年 3 月 15 日（木）新百合 21 ホールにて開催）」における映画『毎日がアルツハイマー 2』の上映のコーディネート、当日映写・ゲスト手配・会場整理指導を担った。当日の動員は 202 名。ゲストに迎えた関口監督のトークは前回より長めに設定し、今回はスライドショーなしで行なったが、大変好評を得た上映会となった。

[協賛事業]

「平成 29 年度あさお芸術のまちコンサート」に、名義等で協賛を実施した。

II 運営組織の状況に関する事項

1. 役員

(1) 役員の氏名及び職制上の地位

地 位	氏 名	専 門
理 事 長	藤田 朝也	演劇・ミュージカル
専 務 理 事	白鳥 あかね	映画・映画祭
理 事	黒田 隆	音楽
理 事	千葉 茂樹	映画・映画祭
理 事	森 正敏	演劇
理 事	安岡 卓治	映画・映画祭
理 事	瀧澤 春江	映画祭・バリアフリーシアター制作
理 事	岩倉 宏司	宣伝・広報
理 事	大谷 賢治郎	演劇
理 事	中山 周治	教育・映画祭・地域
理 事	徳沢 純子	映画祭
監 事	田島 俊明	行政
顧 問	佐藤 忠男	映画評論家
顧 問	中島 豪一	川崎新都心街づくり財団評議員
シニア・アドバイザー	下八川 共祐	昭和音楽大学理事長
シニア・アドバイザー	岩崎 敬	環境デザイナー

決 算 報 告 書

(第 12 期)

自 平成29年 4月 1日

至 平成30年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

貸借対照表

平成30年 3月31日 現在

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
【流動資産】	5,554,199	【流動負債】	2,341,958
現金及び預金	4,421,199	短期借入金	2,111,642
未収入金	1,133,000	未払費用	146,006
		未払法人税等	70,000
		預り金	14,310
		負債の部合計	2,341,958
		純 資 産 の 部	
		【株主資本】	3,212,241
		利益剰余金	3,212,241
		その他利益剰余金	3,212,241
		非営利事業に係る繰越利益	5,939,826
		繰越利益剰余金	-2,727,585
		純資産の部合計	3,212,241
資産の部合計	5,554,199	負債及び純資産合計	5,554,199

損 益 計 算 書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

科 目	金 額	
【売上高】		
売 上 高	1,881,916	
広 告 売 上	1,312,600	
そ の 他 収 入	1,290,429	
バ リ ア フ リ ー 収 入	1,446,507	
売 上 高 合 計		5,931,452
【売上原価】		
当 期 商 品 仕 入 高	179,638	
映 画 仕 入	1,709,552	
合 計	1,889,190	
売 上 原 価		1,889,190
売 上 総 利 益 金 額		4,042,262
【販売費及び一般管理費】		
販 売 費 及 び 一 般 管 理 費 合 計		12,935,154
営 業 損 失 金 額		8,892,892
経 常 損 失 金 額		8,892,892
【特別利益】		
川 崎 市 負 担 金	6,439,000	
麻 生 区 推 進 委 託 金	997,100	
協 賛 金	450,000	
日 本 芸 術 文 化 振 興 助 成 金	1,133,000	
特 別 利 益 合 計		9,019,100
税 引 前 当 期 純 利 益 金 額		126,208
法 人 税 ・ 住 民 税 及 び 事 業 税		70,000
当 期 純 利 益 金 額		56,208

販売費及び一般管理費内訳書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

科 目	金 額	
給 料 手 当	4,018,545	
雑 給	373,458	
広 告 宣 伝 費	136,312	
接 待 交 際 費	59,455	
会 議 費	13,080	
旅 費 交 通 費	689,914	
消 耗 品 費	253,945	
事 務 用 消 耗 品 費	121,336	
支 払 手 数 料	325,000	
地 代 家 賃	2,371,981	
リ ー ス 料	355,087	
保 険 料	189,901	
支 払 報 酬 料	238,600	
雑 費	268,762	
謝 礼	1,355,235	
制 作 費	727,302	
ホ ー ム ペ ー ジ 関 連 費	17,138	
印 刷 費	1,409,585	
記 録 費	10,518	
販売費及び一般管理費合計		12,935,154

株主資本等変動計算書

自 平成29年 4月 1日
至 平成30年 3月31日

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

(単位： 円)

【株主資本】

資 本 金	当期首残高		0
	当期末残高		0
利 益 剰 余 金			
そ の 他 利 益 剰 余 金			
非営利事業に係る繰越利益	当期首残高		5,139,826
	当期変動額	非営利事業分	800,000
	当期末残高		5,939,826
繰越利益剰余金	当期首残高		-2,783,793
	当期変動額	当期純利益金額	56,208
	当期末残高		-2,727,585
利 益 剰 余 金 合 計	当期首残高		2,356,033
	当期変動額		856,208
	当期末残高		3,212,241
株 主 資 本 合 計	当期首残高		2,356,033
	当期変動額		856,208
	当期末残高		3,212,241
純 資 産 の 部 合 計	当期首残高		2,356,033
	当期変動額		856,208
	当期末残高		3,212,241

注 記 表

特定非営利活動法人 KAWASAKIアーツ

この計算書類は、「中小企業の会計に関する基本要領」によって作成しています。

重要な会計方針に係る事項に関する注記

資産の評価基準及び評価方法

有価証券の評価基準及び評価方法
移動平均法を採用しています。

たな卸資産の評価基準及び評価方法
最終仕入原価法を採用しています

固定資産の減価償却の方法
定額法を採用しています

収益及び費用の計上基準
発生主義を採用しています

その他計算書類の作成のための基本となる重要な事項
金利の取得原価算入はしていません。

一株当たり情報に関する注記

一株当たり純資産額	0 円 00 銭
一株当たり当期純利益金額	0 円 00 銭